

# CARILLON カリヨン

日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学 学報



「生きる」を支える人になる

## Contents

目次

学報の創刊によせて 日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学 学長 森 美智子	2
万感の黙礼～学報「カリヨン」の創刊によせて 学校法人 日本赤十字学園理事長 大塚 義治	3
新たな飛躍へ～学報の創刊によせて～ 看護学部 学部長 尾岸 恵三子	4
エッセイ／二足の草鞋 副学長 畑尾 正彦	4
ふくしのすばる達へ～学報の創刊によせて～ 介護福祉学科 学科長 村上 照子	5
地域との交流／“にっせきでかだる”がスタート	5
1年間の活動を振り返る	6
「地域の元気、引き出す大学・短大へ」	9
学生Voice	10
「自分の目標」見えた～モナッシュ大学で語学研修～ 看護学科 相馬成子さん	
中国・韓国 スタディ・ツアー雑感 看護学科 桐原江莉さん	
教育G Pの取組み	11
People@ランダム	12
こんな人、あんな人	12
編集後記	12

## 創刊号

カリヨンとは、(フランス語:Carillon)教会の塔などに吊り下げられる音程を異にする多数の鐘。16世紀以来、特にフランドル地方(現フランス領)で発達し、自動装置を持つものもある。赤十字の理念より「人道・博愛・奉仕」を3つの鐘に投影した本学のシンボルとして、平成8年の短大開学時に設置された。これにちなんで本学学園祭も「カリヨン祭」と呼ぶ。

# 学報の創刊によせて



日本赤十字秋田看護大学  
日本赤十字秋田短期大学

学長 森 美智子

**大**学開学2年を経て、完成年度前の大学院開学という記念すべき年度に学報を創刊できることは、大変喜ばしい次第です。

この学報の創刊をもって、小規模の単科の大学・短期大学ではありますが、すべての機構・機能が完成したと言えます。

大学・短期大学は合同の経営会議、教授会のもと各種委員会が、センター機構と相まって、本学の運営に縦横に絡み、教育・研究機能が十分に発揮できるようになりました。

大学・短期大学の教育理念である①赤十字精神の涵養、②PBL教育を通じた問題解決力・開発力の育成、③地域・国際に貢献できる専門能力の育成に努めています。一方、豊かな学生生活を支援するために、アドバイザー機能の強化・自治活動やボランティア活動の支援・その他、学生委員会・国際交流センターなどが中心になり活動しております。しかし、今後はさらなる

質の向上が課題となります。学部教育は、教養人として、専門職業人としての基盤をもつ人材を育成することにあります。

大学は、学術の中心として広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とし（学校教育法）、修士課程は、広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力又はこれに加えて高度の専門性が求められる職業を担うための卓越した能力を培うこととなります。博士課程は、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い、又はその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うこととしています。（大学院設置基準）

大学は、大学院をもって始めて教育・研究が充実し、大学の使命を果たせる良い大学と言えるわけです。

大学院までを視野に入れた教育環境

の中では若手研究者も育ち、社会に貢献できる知的財産が開発され、次の時代を担う学生に恒常的によりよい刺激が与えられ、よい教育ができます。すなわち、高等教育機関には大学院まで一貫した教育が望まれるわけです。

本学大学院は、看護学に求められている課題に対応し学際的指導力を発揮するために、教育研究の高度化を図り、臨床指向型研究を主軸に置いた研究活動を積極的に進め、高度な実践力を持つ専門職業人および専門分野をリードする研究者の育成を赤十字の理念のもとに行うものです。

本学大学院（修士課程）の教育研究機能が秋田県をはじめ東北地方の看護専門職の資質の向上に繋がり、ケアに反映されることを期待しております。また、国際的活躍に、国際赤十字機関に貢献できることを願っています。

どうぞ、多くの皆さまが研鑽の場とさせていただきますように、本学はお待ちいたしております。

H i s t o r y



## 【沿革】

1896(明治29)年	9月	日本赤十字社秋田支部救護看護婦養成開始
1914(大正3)年	7月	日本赤十字社秋田支部病院救護看護婦養成所として発足
1946(昭和21)年	4月	秋田赤十字病院看護婦養成所と改称
1950(昭和25)年	12月	秋田赤十字高等看護学院と改称
1976(昭和51)年	4月	秋田赤十字看護専門学校と改称
1996(平成8)年	4月	日本赤十字秋田短期大学開学(看護学科・介護福祉学科)
1998(平成10)年	3月	秋田赤十字看護専門学校閉校
2009(平成21)年	4月	日本赤十字秋田看護大学開学
2011(平成23)年	4月	日本赤十字秋田看護大学大学院開設

# 万感の黙礼

～学報「カリヨン」の創刊によせて～



学校法人  
日本赤十字学園理事長

大塚 義治

**昨**年末の大学院設置認可の朗報に続き、学報「カリヨン」創刊の旨を耳にした。喜ばしい限りである。1996年の日本赤十字秋田短期大学開学以来、関係者のご努力により、本学が秋田の地にしっかりと根を揚げ、着実な歩みを進めていることは、まことに心強い。

ところで、私は秋田を訪れるとき、いつも、ある人の名を思い浮かべる。といっても面識がある方ではない。本県出身の作家、西木正明氏。私は、氏の作品の大ファンなのである。

例えば、昭和六十三年の直木賞受賞作「凍れる瞳」もそのひとつ。主人公はヴィクトル・スタルヒン。今の若者は耳にしたこともないだろうが、戦前の読売巨人軍に在籍、四十二勝という今なお破られない年間最多勝記録を持つ白系ロシア人の投手だ。

特に印象深いシーンがある。

時は昭和八年、夏。旭川中学のエース、スタルヒンは、甲子園出場をかけた試合で六回まで完全試合を続けていた。しかし、相手側応援席から彼の人種などを殊更ことさらにあげつらう汚い野次が飛ばされると、突如制球を乱して三連続四球を与え、一転、大ピンチを迎える。

この山場でバッター・ボックスに入ったのが相手校のエースで四番の〈田原〉。その田原は、スタルヒンの明らかなボール球にも敢然とバットを振り、三球三振をする。

味方の観客のすさまじい怒号の中を、悠々と自軍ベンチに戻る田原。スタルヒンは彼をじっと見つめながら、帽子のひさしに手を触れ、万感の思いを込めて黙礼するのだった。

この後スタルヒンは立ち直り、見事ノーヒット・ノーランを達成するのだが、やがてこの二人の運命は、

戦争という大波に翻弄ほんろうされ、悲劇的な道筋をたどっていく……。

これは野球小説ではない。だが、田原三振の場面は強く脳裡に焼きつく。真っすぐな正義感、小気味いいフェアな態度。いかにも若者らしいすがすがすがすがしさに、私は羨望せんぼうの念すら覚えながら、深く心を動かされる。

そして、私の連想は勝手に広がっていく。

若者は、未完成で荒削りだが、瑞々しさに溢れた魅力的な素材のようなものである。それをひたすら慈しみ、丹念はくに育て、社会に送り出す――。教育という仕事の役割も価値も、また苦しみも喜びも醍醐味だいごみも、そうしたところにあるのではないだろうか、と。

本学から巣立つ若人の輝かしい未来と、本学の一層の発展を心から祈念し、学報創刊の祝意に代えさせていただきます。

P h i l o s o p h y



## 【一対の額】

本学図書館には「一対の額」があります。大正期に開院した秋田赤十字病院時代からのナイチンゲール像と、一卒業生の篤志により昭和18年に寄贈された日本の看護を開いた光明皇后像です。これらの絵画が描かれた経緯は異なりますが、奇しくも両作品とも帝展入選の画家高橋萬年氏(1897～1956)により制作されたものです。これらの絵画は、学生が手本にする看護師像を象徴したものとして、以来、「一対の額」として本学に受け継がれてきました。



# 新たな飛躍へ

～学報の創刊によせて～



日本赤十字秋田看護大学  
看護学部

学部長 尾岸 恵三子

**秋** 田の粉雪舞う美しい夕暮れに目を奪われながら、小学生時代の成し遂げていない課題を思い出した。それは、秋の写生会のことであった。風景画を日がな描き終え、気付くと夕暮れ近く、辺りは薄暗い、しかし私の描いた絵は真昼のように明るいものであった。困った！！どうしたものか？夕暮れ色は？困り果てて夕闇を薄いねずみ色の靄と思ひ、全体に薄く塗ってみた。すると、真っ黒い景色に変わった。先生は、それを観て「おお暗くなったナー、まあ勇気ある一塗りからの大発見じゃ、きれいな夕暮れは難しいなあ。」と笑っておられた。何故か褒められたような、偉大な発見をした

ようで嬉しかった。しかし、折角の黄金の稲穂が黒い稲穂となり本当に気の毒なことをしたと思った。夕映えの稲穂のある景色は、私の永遠の課題のままである。あわせて、その日の母の手作りのお弁当は、日の丸と秋ナスの漬け物入りの焼きおにぎり2個であった。美味しかったおにぎりや暗い絵が重なる苦い思い出である。

先日、本学で岩田誠先生の“忘れるという脳の働き”の講演をお聴きした。その時に「出来事記憶」は薄れていくだけで消えはしないと伺った。秋田の美しい夕暮れは、薄れていた小学生時代の苦い思い出を脳の働きで呼び起こしてくれたのであろうか。

私が、食看護学に道を求めたのも、脳のどこかに“暖かさが伝わる食”“母のおにぎり”があったのであろう。そして私の教育の基本姿勢は、小学生時代のこの先生が原点であるのかも知れない。

本学の多くの学生もまた、「出来事記憶」を通して看護と介護福祉の道を歩み始めたのではないだろうか。貴重な人生経験を積んで今がある学生と共に、人々の健康と幸福につながる生活に密着した看護と介護福祉の深奥を極める学園創りに向けて“新たな飛躍へ”と前進したいものである。学報創刊に当たり心より念じる。

## エッセイ *E s s a y*

### 二足の草鞋

日本医学教育学会誌で「教育者の教育への動機づけ」が特集されたことがある。その背景に、当時の大学医学部教員は放っておいても研究者としての能力を高めることには熱心だが、教育活動については研究の邪魔にならない程度という者が多いという状況があった。その特集の埋め草に、一介の短気な外科医者が、二足の草鞋を履いたに至った経緯を書かせていただいた。

大学院での研究を終えて山陽道の病院に赴任した直後に、かの大学紛争が持ち上がった。たまたま母校を訪れると、教授は階段教室の最前列に座られ、どこかの学生がその耳元にメガホン突きつけて妙な口調でなにやら叫ぶ

のを、数段うしろの席で身を固くして聞かされた。若い医師たちの大学医局からの派遣は、当分望めそうにない。全国には、卒業生を送り出している大学がまだあった。病院として広く臨床研修医を公募する制度を作ろうではないかと仲間と相談し、翌年の春にはなんとか形を整えた。

あれこれ模索の折も折り、日本医学教育学会が発足したことを本屋の店頭で立ち読みし、さっそく入会した。その学会のメンバーは、当時の標準的な医者とはひと味違う変人ばかりだったが、今にして思えば賢人揃いだった。初めて参加したFD(当時はTeacher Trainingと称した)で、全国から集まった20名が、



副学長  
畑尾 正彦

日常の診療を離れて7泊8日間、寝食を共にして語り合ったことは、教育に関してはもちろん、人生観をも揺さぶられる経験であった。それから20年間、診療と教育の二足の草鞋を履いたあと、前任地で専任の教員になった。その埋め草は「教育に関わることの最大の楽しみは、これから育とうとする人たちと出会うことであり、そのたびに明日もまた楽しい一日がひろがる。」と続く。

そして今、お前の人生は?と尋ねられたら、即座に“外科医”と答えるに違いない。

## ■ 学科長メッセージ

# ふくしのすばる達へ

～学報の創刊によせて～



日本赤十字秋田短期大学  
介護福祉学科

学科長 村上 照子

学報創刊号名が「CARILLON～カリヨン～」との報に、平成8年、短期大学がこの上北手の地に開学した時のことが鮮やかに蘇ってまいりました。

開学式の日、「本学は、秋田の恵まれた自然の中で、人と人とのふれあいを大切に、豊かな人間性を育む、をメインテーマとし、赤十字の理念を基盤とし、教育、研究を推し進め、21世紀に羽ばたく人材を育成することを目的とし設立する。広大な学生プラザは交流の場として、玄関から「風の舞」のオブジェまでは、現在から未来に向かって発展することを意味し、どの位置からも人の姿が見えるようなガラス張りの間仕切りは、人と人とのふれあいを大切にすることと開かれた短大を意味している。このような開放的なキャンパスで21世紀の超高齢社会に向けて、

看護と介護福祉に意欲と情熱を傾け、その中でより高い自己成長と自己実現を目指して、今日ここに始まることを記念する。この宣言とともに、高らかにカリヨンベルが鳴り響いたことをついこの間のことのように思い出します。

また、介護福祉学科には開学時に、「ふくしのすばる達へ」という介護学生賛歌が創られていますのでご紹介したいと思います。

「ふくしのすばる達へ」

### 1. 飛べ飛べ、飛べ飛べ

君たちを待っている福祉の街へ

痛みのわかる心をたずさえて

利用者の目となり手となり足となる

君の青春に輝きを！

### 2. 行け行け、行け行け

街を越え国を超え待つ人のもとへ

福祉の優しい心をたずさえて  
命のやすらぎのために

人道ではばたく

あなた達の人生に栄光を！

作詞 立山正子（開学時の学科長）

作曲 富野弘之（現 本学事務副部長）

あれから15年の月日が流れました。朝な夕なにかリヨンの音を聞き、巣立っていった多くのすばる達が今、まさに21世紀超高齢社会のまっただ中で介護福祉の中核となり活躍しています。これから何を目指し、どこに向かおうとするのかを考えるとき、あらためてこの開学時のメインテーマ、教育の原点に変わりはないことを思います。これからも人のこころの痛みのわかるすばる達の育成をめざして、そしてすばる達の心の中でカリヨンベルが鳴り続けることを願っています。

## 地域との交流

### “にっせきでかだろ”がスタート

地域交流の拠点としての役割を担う

本学看護学部看護学科、介護福祉学科は協働して地域交流の拠点としての役割を担うことを視野に入れ地域交流センターを開設した。その活動の一つとして昨年4月、“にっせきでかだろ”の「健康相談」サロンがスタートした。

本学のある上北手地区の皆様のご意見を参考にして、気軽に、気負いなく何でも語れる場所として毎月2回の開催を基本に活動を続けている。現在は、地域性あふれた豊かな話題性のあるサロンに成長している。最近、食の伝承について、嫁が持ち込む食の伝承、男性が支える食の伝統、秋田の食文化の特徴と健康についてなどをテーマとし、聴き語りでもとめる計画をしています。また、地域の皆さんが持参される手料理に舌鼓を打っているこの頃の活動です。



地域の方々に困む右から尾岸恵三子教授、中村順子准教授、左端が佐藤美恵子助教



# 1年間の活動を振り返る



「気づき、考え、行動する」をスローガンに、  
「命と健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」に取り組む



## 奉仕

### GWに全学生がボランティア活動

#### 地域に飛び出し恒例の「ボランティアの日」

毎年、5月の連休期間中に行われる本学恒例の「ボランティアの日」の活動が今年度も全学生が地域に飛び出して活発に行われた。この活動は本学ボランティア支援班（班長：佐藤沙織助教）の調整のもと自然・環境保護活動から児童育成、福祉・医療、訪問活動など多岐な活動にわたり、学生は、「仲間や係わった人々と喜びを共有することができた」「社会で何が求められているかを考え、自ら動くことの大切さを学んだ」などの感想を寄せていた。



#### 赤十字運動イベントにも協力

また5月16日にイオンモール秋田で日赤秋田県支部が開催した赤十字運動月間イベントにも本学学生赤十字奉仕団員が参加、ショッピング街に集った市民と交流のひと時を持った。

本学学生赤十字奉仕団（北林瞳委員長）は、これまでも秋田水害での被災住宅清掃活動やマンマー水害救援募金、ハイチ地震救援募金などの活動のほか、献血ボランティア活動や施設訪問活動などに取り組んでいる。



### 臨地実習を前に「宣誓式」 キャンドルの火に新たな誓い

看護、介護福祉の臨地実習を前に、自らの進むべき道への決意を新たにする本学恒例の「宣誓式」が5月7日（金）開催された。

学生らはナイチンゲール像が捧げ持つキャンドルから、それぞれ自らのキャンドルに採火し、教職員や父母らが見守る中、厳かな雰囲気の中で「誓いの言葉」を唱和した。時代の移ろいの中で戴帽式などの行事が減る傾向にある中、本学の宣誓式は、看護・介護福祉の両学生が共に参加できる行事として学生らの要望によりスタートしたもの。誓いを終えた学生らの顔は、一様に清々しさに満ちていた。





奉仕

## 学生エコ活動隊も結成～GP環境学習班

学内の環境意識を高める活動を促進しようと看護・介護福祉両学科の学生16人のメンバーで学生エコ活動隊が結成された。エコ隊は環境ポスターの学内掲示などの活動を通して、学内の環境意識を少しでも高めようというもの。

メンバーはエコ隊への参加の動機を「前の大学時代にも環境問題に取り組んできたので、ここでもやりたいと思った」（泉川洸さん）、「環境問題のビデオを見る講義に参加して共感し、触発されました」（吉川みなみさん）、「環境は今最も注目されています。関心を持っていかねければと思った」（村上美智恵さん）などと話している。今後の活動が期待される。



## eco な 活動

### 全学生・教職員が身近なエコ活動を～「こだわり宣言」を実施

地球環境を守ることは、21世紀に生きる私たちすべての責任。本学では「自分にできる一歩から」をスローガンに全学生、教職員が「地球のためのわたしのこだわり宣言」を実施、身近なエコ活動を推進しています。この核になってきたのが教育GPで設置された環境学習班（班長：永易裕子先生）。結成された学生エコ活動隊と色んな取組みにチャレンジしています。



みんなでeco活動♪



奉仕

## 盲人福祉大会でボランティア活動

5月19日～21日まで秋田市で開催された第63回全国盲人福祉大会で参加者の受付や会場案内など本学の看護、介護福祉両学科の学生がボランティアとして活動しました。大会には全国から約1000名の視覚障害者の方々が参加し、学生にとっては自ら課題を見つけて対応する、「気づき」「考え」「行動する」という本学の教育理念を実行する場となりました。大会には多くのボランティアが協力しましたが、若い学生ボランティアは本学だけであり、関係者から大変喜ばれました。



命と健康  
安全

## ライフスキル学習班が水の安全講習を開催

5月7日～9日まで日赤秋田県支部の協力により、秋田県総合プールで水上安全法講習会を開催した。これは教育GPのライフスキル学習班（班長：木下彩子助教）が主催したもので、今回は10名の学生が参加、救急法の基礎知識から実技まで真剣に取り組んでいた。

本学では教育GP採択以来、文科省の支援を得て救急法講習用的人形やAED訓練キットなど安全講習のための資機材の整備を進めてきた。



国際理解  
親善

## 中国・韓国へスタディ・ツアー

8月2日～12日まで本学学生6人と教員3人が中国・韓国へのスタディ・ツアーを実施した。一行は、ソウル赤十字看護大学で交流事業を持った後、中国に四川大地震の復興支援が行われている成都市を訪問、被災地域の病院や日赤の支援で再建された魏城鎮中心衛生院などを視察訪問した。学生は真新しい病院で、現地看護師の指導による院内実習を体験し、緊張した面持ちだった。また上海万博会場も訪れ、国際赤十字・赤新月パビリオンの展示も視察し、有意義な10日間を過ごした。



国際理解  
親善

## 国際人道法教育フォーラム2010を開催

10月2日に昨年に引き続き、教育GPの一環として「国際人道法教育フォーラム2010」を開催した。今年は「21世紀の人権と人道」をテーマに、国際人道法の権威である関西大学名誉教授の藤田久一先生、赤十字国際委員会（ICRC）駐日事務所長の長嶺宣義氏、ヒューマン・ライツ・ウォッチ東京ディレクターの土井香苗氏をお迎えしシンポジウム形式で行われた。フォーラムでは、現代における人権と人道の法的概念の解説に続き、ICRCの戦争犠牲者支援の取り組み状況や人権団体の紛争地域での人権擁護活動などが紹介され、会場との活発な質疑が行われた。



国際理解  
親善

## ソウル看護大生交えクリスマス会

12月20日～22日までソウル赤十字看護大学の学生と教員21名が来学し、本学学生と交流した。一行は、国際交流授業[グローバルスタディ]に参加した後、秋田赤十字病院、秋田赤十字乳児院を訪問し、子どもたちと交流した。また老人看護の授業や実習を体験したあと、角館への観光や本学学生とチームを組んでのショッピングなどを楽しんだ。

最終日には本学学友会主催によるクリスマスパーティーに参加し、韓国の民族衣装のファッションショーや日韓のガールズグループ「AKB48」「モーニ

ング娘。」「少女時代」「KARA」の歌や踊りを披露し、会場は終始、熱気にあふれていた。司会を担当した笹川夢都美さん（看護学科1年）は「すごく盛り上がったとても楽しかった。英語を普段の生活で使うことはなかったので大変だったけど、英語が伝わる喜びが嬉しかった。今度は韓国に行きたい」と話していた。元気な笹川さんの秘訣を聞いてみると、「嬉しかったこととか、楽しかったことを毎日日記に書いてることかな」と快活に答えてくれた。

司会を担当した  
笹川夢都美さん





# 地域の元気!引き出す大学・短大へ

## ● 臨場感いっぱい!に救護訓練を実施 ~地域の方々も見学にご招待~

災害現場での活動や被災者の立場を模擬的に体験する本学の「災害救護訓練」が9月24日、全学生・教職員の参加を得て行われた。今年度も日赤秋田県支部と秋田赤十字病院の協力を得て、地震発生を想定して行われ、救護所の設営訓練から患者の搬送・応急手当の実施、START式トリアージの実施、通信訓練、炊き出し班による昼食の調理に至るまで多岐にわたる活動が展開された。訓練には、地元住民の方々も招待された。

参加した学生からは、「いざという時にどう対処したらよいか学べた」「日頃から自分の出来ることやすべきことを考え訓練しておくことが災害時に力を発揮できる秘訣だと思った」「安全でスムーズな搬送・トリアージがその後の対応に大きく関わってくることを実感した」などの感想が寄せられた。企画実施を担当した災害救護訓練班班長の佐藤美恵子助教は、「災害現場でも活躍できる、特に劣悪な条件下でも的確に行動できる人材に必要な知識、技術、態度、精神力を養うためには継続して教育的な支援をしていくことが必要」と話している。



## ● 地域で人気!!「3・1・2お弁当箱法」 ~地域交流センターの「すこやか子育て支援」~

健康な食生活の大切さを、お弁当箱を使った料理を通して学ぼうという本学地域交流センター(センター長:尾岸教授)が実施している「3・1・2お弁当箱法」の講習には、毎回多くの市民が集い好評を博している。

平成22年度秋田県少子化対策応援ファンドの助成を活用して12月18日に行われた講習は、「お弁当を通じて親子がふれ合い、子育ての不安や負担感を軽減しよう」をテーマに「子育て支援編」として開催。参加者はお弁当のバランス良いつめ方やレシピを見ながら調理などに挑戦、最後はみんなで一緒にお弁当を試食した。

子どもと一緒に参加したお母さんは、「ふだん食べていないものも、自分から食べていました。これからも一緒にお弁当を作って楽しもうと思います♪」と話していた。



おいしいお弁当ができたよ!

## 「自分の目標」見えた モナッシュ大学で語学研修

本学では、オーストラリアのモナッシュ大学英語学習センターで英語の語学研修を実施している。私は夏休みを利用して3週間のプログラムに参加した。

同センターには、世界中の非英語圏から学生が集まるため、授業はすべて英語で行われる。休憩中のおしゃべりもお互いに理解できる言葉は英語しかない。また、大学があっせんしてくれたホームステイ先での生活も英語だけ。

彼らの文化や生活をもっと深く知りたかったので、積極的に話しかけ、分からないことは質問するように心がけた。皆親切に伝えてくれるので英語が達者でない私でも苦労することなく、ステイ先では家族だけのパーティーにも参加させてもらった。

わずか3週間の滞在なので飛躍的に英語が上達したわけではない。しかしその土地の文化を作る「人」をもっと知るため、彼らの言葉を理解したいという自分の目標がよりはっきりと見えてきた有意義な3週間だった。



看護学科2年  
相馬 成子さん



## 中国・韓国 スタディ・ツアー雑感



看護学科1年  
桐原 江莉さん

今回スタディー・ツアーに参加したのは、赤十字が世界でどのような活動をしているかを自分で感じることができる機会だと思ったからである。ニュースで地震の被災地での様子を知ったり授業で赤十字のことを学んだりしているが、実際にその現場に行く機会は赤十字の大学だからこそできることだと思う。

四川大地震の被災地では、綿陽市郊外の魏城鎮中心衛生院の近くの仮設病院を視察した。夏場はとても暑く、冬場は凍えるほど寒いところだそう。今は新しい病院が使われているが、この病院は日赤の募金で建てられている。募金が形になって実際に被災地で役立っている。赤十字のネットワークはすごいと思った。このネットワークが今、この瞬間も世界中で人々の助けになっていると思うと、赤十字がどれだけ大きい存在かを感じさせられる。

病院の中で看護師さんの仕事の様子を一緒についていって見学した。実際に医療の現場にいて緊張感があるが、看護師さんが患者とのコミュニケーションによって場を和ませてくれることが病院には必要だと思った。看護師さんの優しさは日本も中国も変わらないと思った。赤十字の支援で再建された育紅小学校では、私たちが歓迎する踊りや詩などの催しをしてくれた。被災者である子どもたちではあるが明るく元気で、子どもたちの笑顔が地震から復興してきていることを教えてくれた。

ツアーを通して感じたことの一つは「言葉の壁」である。伝えたいこと、相手が伝えたいことがわからないというもどかしい気持ちになった。成都医学院での学生交流では特にそう感じた。しかし今では英語でメールのやり取りをしている。

国が違うことでいろいろな価値観も違うがそんなことは全く関係なく共感する話題が多く、メールで会話をすることがとても楽しい。これらを担う世代として様々なことに挑戦していきたい。この体験を今後様々な活動に生かしていきたい。





## 国際人道法の理念を行動化する教育の推進～教育GPの最終年度～

平成20年度に採択された文科省教育GP事業「国際人道法の理念を行動化する教育」の3年目を迎えた本年度は、最終年度として各取組みが実質的な成果が問われる年となった。事業開始以来、全教職員が人道教育班、災害救護班、環境学習班、ライフスキル班など7つのプログラム班を担当して実施された本取組みは、本学の教育理念を具体化するツールとして活用され、学生への教育的効果のみならず、教職員にとっては一体感の醸成や教育目標をより明確化する上で役立った。またGP資金で整備した災害救護訓練資機材やAED、救急法講習資機材などは、今後、本学の貴重な教育資材として活用される。

本取組みの統括センターである国際人道法教育センターの井上教授は「取組みの成果を早急に期待するのは難しいかもしれないが、自主自立し、「気づき、考え、

行動する」学生づくりの種まきが行われたのではないか。」と話している。



### 平成20年度 文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム」採択

#### <実施報告概要>

取組名称：国際人道法の理念を行動化する教育の推進

大学名：日本赤十字秋田短期大学

#### 取組概要

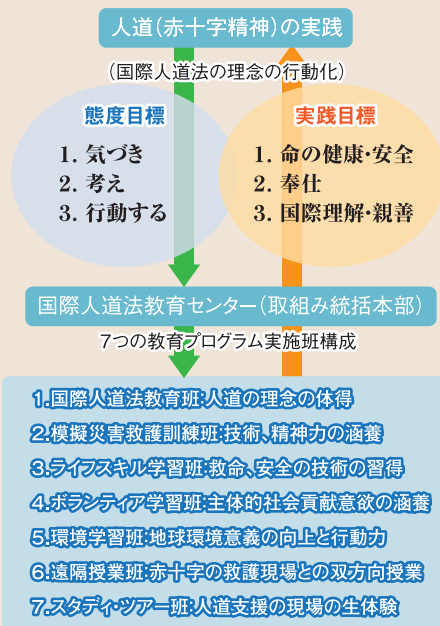
本取組みは、赤十字条約（国際人道法）の基本理念である「人道主義」をあらゆる状況下で実践できる人材育成を目指し、学生に期待される「態度目標」と「実践目標」を掲げて7つの教育プログラムを実践し、教育効果を高める試みです。

#### ●取組の内容・ポイント

問題を自ら発見し、解決の手法を考え、行動により解決を図るのが態度目標のねらいであり、行動の具体的な指針が実践目標です。これらの教育効果を高めるために7つの教育プログラムを採用し、世界の一員として世界に目を向け、また将来の医療・介護職として過酷な状況下（災害など）でも忍耐強く適確に行動できる資質と能力を養うための各種取組みを行った。

#### ●学内外からの評価

- ・学生アンケート等からボランティア意識・環境意識等の向上が見られた。充実した学生生活の動機付けとなったとの感想が聞かれた。
- ・他大学等から本取組みへの高い関心と評価が寄せられた。さらに積極的な情報発信が求められている。



## 介護実習の教育効果を～文科省の支援事業を推進

平成21年度の文科省学生支援推進プログラムに本短期大学の「介護実習の教育効果をあげる実習指導体制」(取組担当代表者:介護福祉学科 土室修准教授)が採択され、各種の取組みを行っています。

これは従来の学生の介護実習に対する

教員の「週2回以上」の定期型巡回指導を「週1回以上」に緩和し、また介護実習施設が遠隔地にある事情を考慮し、定期型巡回指導だけでなく、「通信型指導」を組み合わせることにより、充実した実習指導体制を構築しようとするものです。

具体的には①実習施設へのウェブカメラの配置 ②同カメラを利用した学生相談 ③実習に必要な情報のデータベース化による利用の促進 ④e-mailによる教員連絡網の整備と学生情報の共有などを進めています。

# People @ ランダム

## 「プロから学ぶ在宅ターミナルケア」 秋山正子先生を招き特別講義

NHKの番組『プロフェッショナル 仕事の流儀』でも紹介された訪問看護師 秋山正子先生をお招きし、2月16日(水)、特別講義が開かれた。

秋山先生は、秋田県生まれ。聖路加看護大学卒業後、大阪・京都で看護教育に携わった後、東京で訪問看護活動を開始、現在は白十字訪問看護ステーション所長を務める。この日の講義では、「人生の最期に係わる仕事」と題して、高齢者を看取る場での数々の課題や配慮などについて豊富な体験をもとに話され、「訪問看護は、いのちに寄り添うケアを生活の場にお届けします」と結んだ。先生の活動は、昨年3月のNHK番組でも紹介され反響を呼んだ。



秋山正子先生

株式会社ケアーズ白十字訪問看護ステーション代表取締役、所長。  
1973年聖路加看護大学卒業後、産婦人科病棟での臨床経験を経て看護教育に携わる。  
1992年より医療法人春峰会白十字訪問看護ステーションに勤務。  
2001年有限会社ケアーズを設立、現職に。

こんな人、  
あんな人

## Interview

インタビュー



介護福祉学科1年  
大川 玲子さん

## ヨガで見つけた“自分らしさ”

5年前からヨガを始めた大川さん。介護の道を選んだのもヨガと無縁ではない。

「自分の内なる呼吸にあわせ自分を楽にすること。すると自然とポーズが決まる…。」頑張る時の高揚感や開放感に快感を感じるスポーツと違い、ヨガは高揚感を求めない。「無理せず自分らしくいることを肯定するそんなヨガが好きだ」という。

精神的にも変化が訪れた。「もっとこうしなくては、あしなくては、と自分を追い込んでいた自分が変わり、自分や他人のいい所も見えるようになった。自分らしく生きていれば自ずと結果がついて来る。そう思えるようになった」という。

「あるがままの自分でいいんだ、という思いを利用者さんにも感じてもらいたい」という思いが介護福祉士を志すきっかけにもなった。

可愛い盛り of 一人娘の彩ちゃん(3歳)と実家で暮らすのが、子育てと学生の両立は簡単ではなさそうだ。そんな時の励みとなったのが「2年生の先輩の頑張りだった」という。

「今の悩みは卒論のテーマが決まらないこと」というママさん学生は、自分流の自然体を貫きながらも他人の「頑張り」には素直に感動するようだ。

## 編集後記

本学裏の里山の雪もようやく斑模様となり、このところ春を思わせる陽気が続いている。といっても秋田の冬はこのまま春を迎えるほど甘くはない。もうすぐ芽吹き季節だが、卒業式辺りには大雪になることもよくある。この地に産声を上げて1世紀以上の歳月を重ねる本学は、全国の赤十字教育施設の中で唯一、介護福祉学科を有する短大を持つ。看護と介護は一見領域も専門性も異なるが、ともに「ケア」を共有する点では同じである。

Care の語源のラテン語 cura(キュラ)は、元来、「気がかり」や「心配」を意味した。心配がないことを意味するセキュリティ(security)も語源は同じだ。相手のことを心にかけて、心配することがケアの真髄だとしたら共に人間と向き合う看護と介護は同じ目的を分かち合う。さて、漸く待望の本学学報の創刊に漕ぎ着けました。まだまだ未熟な誌面ではありますが、これからも皆様の叱咤激励を宜しく願っています。(T)

■カリヨン 創刊号 ■発行日/平成23年3月1日 ■発行/日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学

■編集/日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学 情報・広報委員会  
〒010-1493 秋田市上北手猿田字苗代沢17番地3 TEL:018(829)4000